

書評

「移動する子ども」が自ら語る半生

ナディ (2019). 『ふるさとして呼んでもいいですか——6歳で「移民」になった私の物語』 大月書店.

東 雅江*

© 2020. 移動する子どもフォーラム. <http://gsjal.jp/childforum/>

1. はじめに

著者のナディは6歳の時、両親と二人の弟とともにイランから来日した。1991年、イラン・イラク戦争が終わって3年後のことである。家族は、観光ビザで日本に入国し、超過滞在を経たのち在留特別許可を得て現在も日本で暮らす。

ナディは、イランにルーツを持ち、日本で成長した「移動する子ども」である。本書は、ナディ本人が書いた、自身の半生の記録である。異文化への驚き、超過滞在という不安定な立場で日本で働く両親の姿、日本語を学び、学校に馴染み、独り立ちするまでの日々の生活や心の中、子どもの目で見た日本社会を、自分のことばで物語る。

6章からなる本書は、来日する直前のイラン・イラク戦争の記憶に始まり、ほぼ時系列で構成されている。第1章から第4章までは来日してから小学校、中学校へ進み、高校合格を目指すまでの時期で、家族の歴史としては、超過滞在の状態から在留特別許可を得るまでの時期と重なる。第5章は11年ぶりに祖国イランに戻り逆カルチャーショックを受け、「アイデンティティの迷路」でもがきながらも自分なりの答えを見つけて日本で就職するまでの時期である。第6

* 上智大学言語教育研究センター非常勤講師 (Eメール: m-higashi-7n3@sophia.ac.jp)

章は、大人になったナディの語りである。2015年に結婚し、二人の子どもを育てるナディが、自分とイスラム教の距離感について考察したり、親になって、改めて自分の親世代の苦労や悩みに気づいたり、自分と同じ「異文化ルーツの子どもたちの未来」のために社会が何をすべきか提言したりしている。

本書は、誰もが気軽に読めるエッセイのスタイルをとっているが、次の三つの点においても価値があると思う。一つ目は、「移動する子ども」を理解する上で非常にわかりやすい「教科書」であるという点である。ナディがいかにかことばを獲得し、学校などで、どのように異文化と向き合い、成長の過程でどのようにアイデンティティについて悩んだのか、具体的なエピソードとともに語られている。二つ目は、「社会啓発の書」であるという点である。「移民」の子どもとして体験した日本の「移民」政策の実態が生々しく語られ、その体験を読む人に提示することで、自分たちのような存在を理解してほしいと社会にアピールする書なのである。そして三つ目は、日本語教育学において、「移動する子ども」自身が書くことの意義を示唆する書であるという点である。これらの3点に着目しながら本書を読み解いていきたい。

2. ことば・異文化・アイデンティティ

家族で来日したナディに何が起こるのか。本書で多く語られているのは、ことばの問題や、文化や宗教の違いによって引き起こされる生活の中での「事件」などである。年少者日本語教育や異文化間教育の分野ではこういった問題は多く研究されているが、当事者が語る体験談は、その時々思考が細やかに描写されていて、興味深い。

例えば、6歳で日本に行くことが決まった時、ナディは「まるでテーマパークに行くようなワクワク感だけで、一抹の不安も感じていなかった」という。

当時のイランのテレビでは、「おしん」という昔の日本のドラマや、「水戸黄門」のアニメ (!), 「みなしごハッチ」などが放送されていました。それを欠かさず毎週見ている私にとって、日本といえばそうしたテレビ番組のイメージでした。

「日本では、ハチがあんなふうには話したりするんだなあ」

と考えると、日本に行ったら私もハチを飼ってみたいなあ……なんて思っていました。

(中略)

そして決定的なことと言えば、テレビの登場人物がみんなペルシャ語で会話しているのだから、日本でもペルシャ語が通じるものだと信じきっていました。6歳の知識なんて、そんなものですよ。(pp. 18-19)

ナディは「ちびまる子ちゃん」にあこがれていたというだけあって、その語り口にはユーモアがあって、深刻であるはずのエピソードを語る時でも、その文体は明るい。

ナディの学校生活は、小学3年生からスタートした（実際の年齢では4年生に該当していた）。初めての算数の授業が「謎の呪文」のように感じられたり、絵の具の赤と白を混ぜピンク色を作るということに衝撃を受けたりと、海外から日本の学校に編入した子どもが体験するエピソードが次々に紹介される。イスラム教徒であるため、給食で食べられないものがあり困ったり、体操着や水着も他の人と違うものを着てもいいか、先生に交渉したりもする。ナディが体験したことは、日本の小中学校で「移動する子ども」に接したことがある人ならば心当たりのあることも多いかもしれない。しかし、ナディの豊かな表現力によって、まるでドラマを見せられているかのように、新鮮に生き生きと情景が目には浮かんでくる。

そして、「移動する子ども」にとって避けて通れないのがアイデンティティの問題である。「アイデンティティの迷路で」と題した節に、「自分は何者なのか」という問いの答えを探す自分の葛藤について語っている。ナディは「6歳までしかいなかったのに、日本に居ながらにして完全なイラン人をめざしていた」が、ペルシャ語も読めない自分に自己嫌悪に陥ったという。高校生の時、11年ぶりにイランに帰ると、「疎外感をおぼえ」、「イラン人でも日本人でもない『中途半端な人』である自分」にますます悩み、その苦しみはイランに行ってから大学3年まで、実に5年も続いたという (pp.178-180)。迷路から抜けるきっかけとなったのは、自分と同じ多文化の背景を持つ友人、マヌエルの自己紹介を聞いたことであった。

「モンゴル人に見えますが、日系アルゼンチン人です！ルーツは日本ですが、アルゼンチンのアイデンティティなんです」と言っていたのです。(中略)

マヌエルは、見た目と中身のギャップを気にしていないどころか、「自分」というひとりの人が、いくつもの要素を含んでいることを前向きに認めていたのです。

「イラン人らしさ」「日本人らしさ」という二つの枠のどちらかに自分を当てはめようとしていた自分のまちがいに気づきました。どちらかに100%当てはまることなん

て、ありえないのだとわかったのです。子どものころから CCS¹でいろいろなルーツの人たちに出会っていたのに、なぜいままで気がつかなかったのかふしぎです。

この瞬間、私のアイデンティティ問題は終わりをつけました。

「イラン生まれで日本育ち、中身はほぼ日本人。これが私。イラン系の日本人なんだ」

そうとらえ直すことができ、一気に晴れ晴れした気持ちになりました。

(pp.190-191)

5年越しで迷路の答えを見つけた瞬間を書き留めた表現である。この記述からも、本書が単なる体験談ではなく、「移動する子ども」を理解するための良い「教科書」であるということがわかるのではないだろうか。

3. 「内なる国際化」を知っていますか

本書では、11年に渡って超過滞在状態で暮らした著者の体験が赤裸々に綴られており、読者に強く訴えかけてくる。日本が「移民」にどのような政策をとり、その実態はどうであったのか、子どもの「移民」の視点で語られる。

3. 1. 「現場の判断一つで将来の道を閉ざされてしまう」

まず、ナディたち子どもにとって辛かったのは、学校に行けないことであった。来日当初、ナディと二人の弟は、両親が働きに出ている日中、近所で目立たないように、息をひそめるようにして部屋の中で過ごしていた。学校に行けることになったきっかけは、ボランティアの日本語教室であった。その教室の日本語スピーチコンテストで「学校に行きたい」とアピールを続け、賛同した日本人が市役所などに働きかけた結果、入学が実現したのである。この年、1994年は、日本が国連の「子どもの権利に関する条約」²に批准した年でもある。この条約は、外国人の子どもも含むすべての子どもの教育についての権利を認めるとしたものである。しかしナディは、

1 「CCS 世界の子どもと手をつなぐ学生の会」外国に文化的ルーツをもつ子どもに会話や読み書き、学校の勉強のサポートをする学生主体の団体 (本書 p. 123)

2 https://www.unicef.or.jp/about_unicef/about_rig_all.html

ビザがないため、小学校に入学できた後も、中学校に進学できるか、高校はどうかと、常に不安を抱えながら生活していた。実際、次のような現実もあったのである。

CCS で一緒だった友だちの中には、高校に受験の出願をしたところ、教頭先生が事務の人に、在留資格があるかどうかを確認してから受理するように言ったため、受験できなくなってしまったという子もいました。彼はとてもショックを受けていました。ビザがない外国人の子どもは、こんなふうに現場の判断一つで将来の道を閉ざされてしまうことがあります。 (p.153)

このように、子どもの学ぶ権利も、周囲の支援で叶えられたり、認められなかったりということが現実に起こっているのである。

3. 2. 「不安とたたかう日々」

そして、超過滞在、いわゆる不法滞在で何より深刻なのは、いつ強制送還されるかわからない、「いつか突然、振り出しに戻される日がくる」(p. 146) という不安であったという。実際にナディの父親も警察に捕まったことがあった。お祈りの会の帰りに職務質問を受けた父親が警察官に付き添われて帰ってきた時の様子を次のように書いている。

とっさに私は、自分がはじめてもらった通知表を持ってきて、彼らに見せたのでした。

「K 小学校に通ってます！去年やっと入学できたんです。私たちは勉強してるんです。悪いことは何もしていません！」

今度はランドセルを持ってきて、

「これも見てください！」

と、見せました。弟にも教科書を持ってくるように言い、お母さんにはモハマの保育園の連絡帳や制服を持ってくるように言いました。それらを見せながら、

「お願いします。ほんとうに勉強してるんです。捕まえないでください！」

と、泣くことも忘れて言いました。警察官たちは黙ったまま私たちを見て、お父さんを放してくれました。 (p. 109)

当時ナディは家族の中で一番日本語が話せたのであろう。子どもなりの必死の行動が緊迫感をもって伝わってくる。

この不安な日々は、在留特別許可を獲得する高校1年の終わりまで続くのである。在留特別許可を得るためには、入国管理局（現出入国在留管理庁）に出頭し、審査を受けなければならない。本書に詳しい経緯が書かれているが、APFSという市民団体による「在留特別許可一斉行動」に参加し、申請したのである。その一斉行動は、1999年から2000年にかけて行われ、当時新聞などでも取り上げられた³。結果は、「第一次・第二次で出頭した10家族は、多くが不許可になり強制送還されてしまった」（p. 148）という。ナディの一家にとって、これはまさに、合法的に日本にいられるか、強制送還されるかの「イチかバチかの賭け」（p. 145）であった。

3. 3. 「隣人」である私を知ってほしい

私は、本書を「社会啓発の書」としても価値があると述べた。「在留資格って?」、「日本に定住する外国人」というコラムも設けられ、日本の移民政策に関する解説もなされている。しかし、本書は決して堅苦しいものではない。平易な親しみやすい語り口の文章で、漢字には全てふりがなが振られている。「私の経験が、いつか日本のどこかで、性別や年齢、見た目、国籍などを超えて、誰かの役に立つことがあれば、それは私にとってこの上ない喜びです。」（p.218）と書かれている通り、本書は自分と同じような立場の、日本で暮らす外国人や、そのような外国人を「隣人」に持つ多くの日本人を読者に想定している。

ナディは、現在、小中学校や高校、大学やいろいろな団体などで、自分の生き立ちや体験を話すことがあるという。講演でよく語るのは「内なる国際化」というテーマである。

「『国際化』とは、海外からの観光客が日本に来ることや、日本人が外国に行くことだけでなく、日本に住む外国人や異文化ルーツの人がふえることでもあります。こうした国内ですすむ国際化を、私は『内なる国際化』と呼びます。私のような異文化ルーツの人は、それを体現しているのです。」（pp. 205-206）

また、自分と同じ異文化ルーツの子どもを取り巻く環境についても次のように書く。

3 asian people's society HP より http://www.jca.apc.org/apfs/zaitoku/zai_keii_j.html

子どもの権利条約批准から25年がたった現在でも、異文化ルーツの子どもに配慮した法整備はほとんどありません。私自身は、地域の人や学校の先生、CCSのボランティア学生など、さまざまな人の支援に助けられてきましたが、25年たったいまも、相変わらずこの分野は教員の善意やボランティア頼みが現実のようです。(p. 213)

「社会啓発の書」と言ってしまうと、強くて堅い印象を与えてしまうが、本書は、ナディのような「隣人」を持つ多くの日本人に、「隣人」の現実を柔らかなことばで訴えているのである。

4. 「移動する子ども」自身が書くことの意義

「移動する子ども」自身による書は、これまでもあった。例えば、『台湾生まれ 日本語育ち』(温又柔, 2016)は、「移動する子ども」という記憶とその生き方についての自己エスノグラフィックな「学術的研究書」(川上, 2016)であると評された。また、『私の箱子』(一青妙, 2012)も、「幼少期より複数言語環境で成長した子どもの記録と記憶という点」, 「幼少期より複数環境で成長する子どものアイデンティティ構築を考える上で」「極めて貴重な事例を提示している」点, 「『移動する子ども』の家族の歴史を提示している点」で学術的な意味がある(川上, 2012)とされている。

本書も、その流れを汲む「移動する子ども」自身による記憶とその生き方についての自己エスノグラフィーであると言える。本書では、日本でいかにことばを獲得し、異文化に向き合い、どのようにアイデンティティを築いていったのか、ナディ本人の記憶を元に記されている。書き始めたのは19歳の時で、その後完成まで15年かかったという。そのため、子どもの目から見た家族の生活と日本社会、自分自身の思考の記憶が鮮やかに描写されているだけでなく、19歳の時には書けなかったこと、成長してからわかった事実や、成長してからの心の変化についても語られているところが興味深い。

さらに、本書では、「異文化ルーツの子ども」であったナディが、本を書くことによって新たな気づきを得たということに言及している。以下に紹介したい。

日本に来てからの28年間で、壁という壁には当たりつくした！と自分で思っていました。この先もう大きい壁はないだろう、と。でもこの本を書いている最中にも、大

きな壁にぶつかりました。それは、自分の意思や要望が書けない、ということでした。(中略)「日本に住まわせてもらっているのだから、外国人の権利や環境に関して、何かを主張したり要求したりする権利はない」と長らく無意識に思っていたのです。

でも、この本を書いている最中に、それがまちがっていると気がつきました。自分の思いや主張を言葉にすることは、この世界に生きる全ての人が人権として平等にもつ権利だと、はじめて気がついたからです。気づいた瞬間、胸の奥からこみあげるものがありました。

私の人権はイランに置いてきたもので、日本では黙っているべきだと思っていました。

でも、いまなら私はこう言えます。

私のふるさとは、日本です。この先も日本で暮らしていきます。 (pp.217-219)

ナディは、外国人である自分には、日本で自分の思いや主張を述べる権利はないと思っていた。しかし、本を書いている最中に、そうではないと気づく。重要なのは、書くという行為によって、「無意識」下にあった思いが顕在化し、新しい気づきにつながったという点である。すなわち、これが本人にとっての書くことの意義なのである。

また、あとがきには、ナディが本を書く決意をした瞬間について、次のように述べられている。

(前略) 依頼を受けた当時は、自分がなに人であるかを悩みもがいていた真っ最中でした。原稿を書いている最中は、ちょっとした身のまわりの環境や、世界情勢の変化で気持ちが揺らいでいました。書こうとしても、なかなか筆がすすみませんでした。

就職してからは、がむしゃらに働いていましたが、あるときから、無意識に過去が頭の中でよみがえり、涙を流すことがつづきました。小さかったころの私が、いろいろな思い出の場所から、いまの私を見ている光景が頭にうかぶのです。最初は人に話せませんでした。何か月かして、異文化ルーツの友人たちといるときに、このできごとのことを話しました。

「いまが幸せだから、きっと過去を思い出すんだよ」

と言われたとき、別の涙が流れ、それ以来、過去が頭によみがえることはなくなりま

した。そして、私を経験したことを、本にするべきだと自分で感じました。

(pp. 223-224)

このように、「移動する子ども」が自分自身の体験や思いを書くということは、社会に対するアピールになると同時に、書くという行為自体に、「移動する子ども」本人が自分自身を見つめ、理解し、その理解を更新していくという意義があるのである。

5. おわりに

著者ナディが望むように、本書は、ナディのような多文化の背景をもつ子どもたちとその家族、そして、そのような隣人をもつ多くの日本人に広く読んでもらえる書である。

そして、本書は、学術書ではないが、年少者日本語教育学の分野においても価値のある書である。たとえば、「移動する子ども」自身の語りによって、我々はナディのような子どもたちを深く理解することができる。また、書き手も、書くことによって新しい気づきが得られることなどが体験をもとに語られており、示唆に富んでいる。今後は、たとえば教育の現場でも、本書そのものをリソースとして取り入れていくといった実践の可能性なども考えられるのではないだろうか。

「移動する子ども」自身による記録や、小説など、幅広い分野での著作は、これからも増えていくであろう。そして、それらの著作が、日本の「内なる国際化」をさらに豊かに進めていくのではないかと期待している。

文献

川上郁雄 (2012). [書評]「移動する子ども」の壮大な家族史——一青妙 (2012)『私の箱子』講談社. 『ジャーナル「移動する子どもたち」——ことばの教育を創発する』3, 121-127. http://www.gsjal.jp/childforum/journal_03.html

川上郁雄 (2016). [書評] 我住在日語：わたしは日本語に住んでいます。——温又柔 (2016)『台湾生まれ 日本語育ち』白水社. 『ジャーナル「移動する子どもたち」——ことばの教育を創発する』7, 59-69. http://www.gsjal.jp/childforum/journal_07.html